

手話の普及

3年2組6番 小高由愛
3年2組25番 長峯杏莉

Keyword: 「手話」「言語」「コミュニケーション」「多様性」「共生社会」

1. はじめに

私たちが手話(JSL)の普及について探究したきっかけは、耳が聞こえない人や聞こえにくい人と社会とのつながりについて興味を持ったからだ。中学3年生の時に見た耳が聞こえにくい人が主人公となったドラマを見た。これまでの生活で、耳の聞こえない人、聞こえにくい人と関わる機会が少なく、普段の生活の中で意識していなかった。その一方で、少し耳の聞こえない人や聞こえにくい人の視点を意識してみると、私たちの生活は耳からの情報が多く、「音声」に大きく依存していることがわかった。SNSやその他のインターネットで調べてみても、最近は電光掲示板などの目で見える情報も増えてはいるが、耳の聞こえない人や聞こえにくい人はまだ生活に不便を感じる機会が多いと書いてある記事を沢山目にした。もし私が耳の聞こえない人や聞こえにくい人の立場だったら、他の人と円滑にコミュニケーションを取るための方法が少ないため、大きな困難を感じる場面がすごく多いのではないかと考えた。これらのことから、耳が聞こえない人や聞こえにくい人が他の人とコミュニケーションを取る1つの方法である手話をもっと多くの人たちに広めることが、耳が聞こえない人や聞こえにくい人が他の人と会話をする際に感じる大きな壁を少しでも低くできる方法なのではないかと考えた。手話と聞くと、ジェスチャーのような存在だと感じる人が多いだろう。だが、手話(JSL)は英語や日本語などの他の言語と同じような「手話」(JSL)という1つの言語だ。他の人に手話を広めることで、もっと手話を身近に感じ、より多くの人が手話に興味を持ってくれるのではないかと考えた。

2. 序論

本探究の目的は、手話(JSL)の普及を進めることであり、学生が日常的に手話(JSL)に触れることで手話(JSL)をひとつの言語としての認識が高まることを仮説とし研究することで手話(JSL)の普及につながると考える。まず言語とは、多くの意味があるが主に音声、身体動作、図像により個人の間で知識を共有するための記号体系だとされている(言語分野 日本学術会議より引用)。手話(JSL)は2011年に「言語」だと法的に位置付けられている(内閣府HPより引用)。また多くの市町村や自治体でも「手話言語条例」が制定されている。しかし、一般の認識においては、手話(JSL)が「正式な言語」であるという理解が必ずしも広がっているとはいえない。特に学生層において手話(JSL)を1つの言語としてどの程度理解しているのか、またそれをどのように学びたいと考えているのかについては十分に検討されていない。本探究ではその点を明らかにし、今後の手話(JSL)の普及のありかたについて考える。

これまでの研究では、学生が手話(JSL)をどのように認識しているかが多く調査されている。関西学院大学の研究では、「大学における日本手話教育実施による学生の手話認識の変化」として、手話教育を経て学生が手話(JSL)を言語としてどれだけ認識しているかを調査した。この研究を通して、身近に手話(JSL)があることで手話への関心が高まり、手話(JSL)が1つの言語であることを認識する生徒が多くなっていることがわかる。これらの研究から、教育や学習の機会が学生の手話(JSL)に対する認識を変化させ言語としての理解を広げる上で大きな役割を果たしているといえる。

本探究の資料は、本校の生徒を対象としたアンケートの結果である。アンケートでは「手話（JSL）を一つの言語として認識しているか」、「手話（JSL）への興味関心が高まったか」、「手話（JSL）をもっと学びたいか」などについて質問する。アンケートは活動開始前と開始後に実施し、結果を比較できるようにする。

本探究の探究方法としては、週に1回廊下には回答者参加型の手話（JSL）紹介のポスターを中学生1、2年、アートルーム前の教室前廊下に加え、下駄箱前に掲示する。また、放課後に手話（JSL）カルタを実施することだ。これらの活動を通して、生徒が手話（JSL）に触れる機会を増やし、言語として認識するのかを検討する。

3. 本論

今回の探究では活動前アンケートに25人（高校3年92%、高校2年8%）、手話（JSL）紹介のポスターには5回総合で337の回答、手話（JSL）カルタには5人（高校3年3人、中学1年2人）、活動後アンケートには 人であった。

①活動前アンケートについて

	手話（JSL）を知っていますか？	手話（JSL）に興味を持っていますか？	手話（JSL）は1つの言語だと思いますか？
肯定的回答	96%	88%	100%
否定的回答	4%	12%	0%

②週に1回の手話（JSL）紹介について

合計で5回行い、約1週間で張り替えた。以下は参加数を表した表である。

正解／場所	1階靴箱前	中2廊下	中1廊下	アートルーム前
おはようございます	12	27	19	19
鯉のぼり	14	39	11	9
ありがとう	10	26	8	16
友達	5	17	14	16
雨	12	22	19	17

③手話（JSL）カルタについて

手話（JSL）カルタを行った際には、参加した学生が自然に楽しく手話（JSL）に触れることができた。また、手話（JSL）カルタを作る際には、すぐにわかるように見やすいイラストと絵文字を入れたが、見やすいという声もあった。特に日常的に使う言葉や挨拶はカルタをする回数が増えるごとに覚えていき、強く印象に残っていた。わからない手話も友達同士で「なんやっけ？」や、「これじゃない？」などの会話も生まれ、クラスや学年を超えた交流にも役立つと考えた。また、よく間違える手話（JSL）や、ややこしい手話（JSL）などもわかった。このことから手話（JSL）カルタは知識を増やすだけではなく、手話（JSL）を「みんなで楽しんで学ぶもの」として捉えるきっかけに

なったといえる。特に参加者の声ではなく「もっと違う単語も知りたい」や、「じゃあこれは手話でどうやっていうの?」という声もあり興味が広がったという点で成果があったと考える。

④活動後アンケートについて

週に1回の手話(JSL)紹介ポスターの続きでシールを貼るタイプのアンケートを実施した。下の図は4箇所合計の数を表した表である。なお、廊下に貼ったため、回答の学年の偏りは問えない。

	手話(JSL)への 興味は高まった か	手話(JSL)紹介 を経て1つの言 語だと思うか	手話(JSL)を身 近に感じるこ とができたか	もっと手話 (JSL)を学びたい と思ったか
とてもそう思う	16	10	11	22
そう思う	18	12	13	15
あまり思わない	2	2	4	3
思わない	0	0	0	0

今回の探究を通して、手話(JSL)は一つの言語として豊かな魅力を持つことを実感した。表情や動きによって気持ちを伝えられる点は、音声言語にはない良さであり、誰にとっても学ぶ価値があると感じた。一方で、学校や地域では手話に触れる機会が限られており多くの人には「特別なもの」「自分には関係のないもの」と考えられがちである。しかし、実際学んでみると、表情や身振りを通じて相手の気持ちを伝える力があり、音声言語とは異なる豊かさを備えていることが分かった。また、簡単なあいさつや日常生活の手話を覚えるだけでも、言葉の壁を超えて人とつながることができる可能性を感じた。一方で、手話の普及にはいくつかの課題も浮かび上がった。まず、学校や地域社会において手話を学ぶ機会は十分に整っていないことがある。ポスターやイベントを通して一時的な関心を持ってもらうことはできるが、それを継続的な学びへと発展させるのが困難であると気づいた。さらに、聴者だけで活動するのではなく、ろう者や手話を日常的に使っている人と直接交流する機会を増やすことが、より深い理解や実践につながるのではないかと思う。

4. 結論

手話(JSL)は普段の生活であまり目にする機会がないため、英語や他の外国語のように自然に「言語」として認識されにくい。しかし、このプロジェクトを通して学校で手話(JSL)に触れる経験を増やすことで、誰もが手話(JSL)を一つの言語として理解できるようになり、より多くの人に認められるようになる。手話(JSL)イベントを開催し、多くの人に手話(JSL)の魅力や楽しさを体験してもらうことで、普段あまり触れる機会のない手話(JSL)がより身近な存在として感じられるようになる。このようなプロジェクトを通して、手話(JSL)への関心や理解が深まり、日常生活の中で自然に手話(JSL)に触れたり、学んだりするきっかけを作ることができた。

今後の課題は学ぶ機会だけでなく、実際に手話を使う機会を増やすことだ。学ぶだけでは身につかないので、実際に使うことでより学びを深めることができる。また、今回は学校だけのポスター掲示だったが、学校という限られたコミュニティだったので認知度を広めるために学校以外の場所での掲示が必要だ。具体的にいうと地域やオンライン上など多様な人が手話に触れられる機会をつくるべきだ。聴者同士で学ぶだけでなく、実際にろう者と交流する機会を増やしていくことが必要だ。

5. おわりに

今回の探究を通して、手話は単なるコミュニケーション手段ではなく、誰にとっても役立つ言語であることに気づいた。最初は「耳の聞こえない人のためのもの」と考えていたが、学んでいくうちに、聞こえる人にとっても新たな表現の世界を広げたり、人との関わりを増やすきっかけになることが分かった。探求の過程では、聾学校で実際に障がい者の方々と交流し、日常生活での不便さや工夫を直接聞くことで、自分がいかに「音声のある生活」を送っているかに気づかされ、社会の障がい者への配慮が十分でない現状も実感した。高校生である私たちには社会を大きく変える力はないが、手話を学び、障がい者の立場を理解することで、現実の課題に気づき改善策を考えることが大切だと感じた。

さらに、手話は表情や動きを通して気持ちを伝えられる、音声言語にはない豊かな魅力を持つことを実感した。学校や地域では手話に触れる機会が限られ、多くの人には「特別なもの」「自分には関係のないもの」と思われがちだ。しかし、簡単なあいさつや日常生活の手話を覚えるだけでも、言葉の壁を越えて人とつながる可能性があることを感じた。一方で、手話の普及には課題もある。学校や地域社会で学ぶ機会が十分でなく、ポスターやイベントで一時的に関心を持ってもらっても、それを継続的な学びに発展させるのは難しい。また、聴者だけで学ぶのではなく、ろう者や手話を日常的に使う人と直接交流する機会を増やすことが、より深い理解や実践につながるのではないかと考えた。

6. 参考文献・出典

言語分野 日本学術会議

<https://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/daigakusuisin/pdf/s-gengo6-4.pdf>

関西学院大学 大学における日本手話教育実施による学生の手話認識の変化—関西学院大学学生を対象にした調査から— 松岡克尚(2019年)

<https://kwansei.repo.nii.ac.jp/record/29669/files/6.pdf>